



Become a Wise Man

冒険者生活

異世界転生で賢者になって

~【魔法改良】で
異世界最強~

先行試読版

進行諸島

Illustrator カット

Become a wise man in
different world reincarnation
and adventurer life

Adventurer Life

※この先行試読版は、実際の製品版とは内容が一部異なる可能性があります。

第一章

魔導輸送車。

それは、この世界イバンで最も普及している、大量輸送装置だ。

全長27メートル、積載量30トンを超える巨大な箱が、魔法の力を借りて時速300キロ以上で移動するその装置は、この世界の物流事情を一変させた。

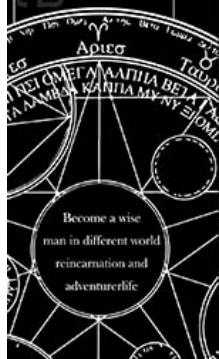
そして俺おれ、ミナトは——その魔導輸送車に、轢ひかれかかっている。

(……あ、死んだな)

猛スピードで近づく魔導輸送車を見て、俺はそう直感した。

本来この場所は魔導輸送車の通り道ではないのだが、恐らく魔導輸送車の操作員が、操作を間違えたのだろう。たまに起きる事故だ。

もちろんただの人間である俺に、時速300キロ以上で近づく物体を避ける術よなどない。



もし、この世界の魔法技術がもっと発展していたら、俺は死なずに済むかもしれない。だが今の世界に、死亡寸前の人間を生き返らせるような魔法技術はない。

630年前に人工魔法知能《デウス・エクス・マキナ》の暴走で200万人以上の死者が出たから、この世界の政治家は魔法に代わる新たな技術「科学」の発展に力を注いでいた。そそそのため、この世界の魔法技術は、ほとんど630年前のまま止まっている。

魔導輸送車も、ちょうどその630年前に開発されたものだ。

当然今の世界に、魔導輸送車の直撃でバラバラになった人間を蘇生させる魔法などない。

——そんなことを考える俺に、魔導輸送車が迫ってくる。

ああ。

来世では、こんな不運な死に方をしませんように。

そう願いながら、俺は意識を手放した。



「あれ？ 生きてる？」

どれだけの時間が経ったかは分からないが、俺は目を覚ました。絶対に死んだと思ったのだが、当たり前所がよかったのだろうか。

そんなことを考えつつ俺は周囲を見回し——困惑した。

「病院じゃない？」

どうやら俺がいるのは、病院ではなく森の中のようだ。

あれだけの事故に巻き込まれば、病院送りは間違いないと思ったのだが。

そして、あれだけの事故に巻き込まれば、絶対に俺の体はボロボロのはずだ。だが俺の体には、傷一つなかった。

「まさか……転生か？」

死んだ人間が他の世界へ転生するという話は、小説などで何度か読んだことがある。だが、まさか現実でそんなことが起こるのだろうか。

そんなことを考えつつも、俺は周囲を探索することにした。

周囲を見ながら歩くこと数分後。

相変わらず周囲の景色は森しかないが……森の中に俺は、前世で見慣れたものが落ちているのを見つけた。

——魔法情報端末。

魔法によって内部に情報を蓄え、話しかけたりキーボードに文字を打ち込んだりすることによって情報を取り出せる装置だ。

随分と旧型のようなが……みたところ、壊れているようには見えない。

もしかしたら、ここがどこなのかを知る手がかりになるかもしれない。

「動くか？」

俺が話しかけると、魔法情報端末がピーピーと音を立て、それと同時にオレンジ色のランプが点灯した。

オレンジ色のランプは、『本体に何か問題があるが、動作は可能』といった状態の時に点灯する。

……途中で壊れてしまうかもしれないが、多少は情報を取り出せるかもしれない。

「ここはどこだ？」

「ここはミーニアの森です」

俺の言葉に、魔法情報端末がそう応える。

旧式の魔法情報端末特有の、妙なイントネーションだ。

ちなみにもっと古い時代の情報端末は、言語の内容自体がかなり不自然だったらしい。

魔法情報端末の進化は、630年前から魔法が進化した数少ないポイントだ。

しかしミーニアの森……知らない地名だな。

「地図を出してくれ」

「地図データには、未探索領域があります。可能な範囲で表示しますか？」

「ああ」

未探索領域——まだ情報がない領域か。

前世の世界には、そんなものはなかった。

世界は高山の山頂から水深数千メートルにも及ぶ深海に至るまで、およ全て調べ上げられて地図に描かれていた。

つまり、ここは前世の世界とは違う。

そんなことを考えながら俺は、地図データを見る。

——地図は、ほとんど埋まっていなかった。

町場所はそれなりに書かれているが、それ以外の区域がほとんど未知の領域という扱いになっている。

「この地図データ、どこから引っ張ってきたんだ？」

「冒険者ギルドが手作業で作成した地図をベースとして、魔法測位法による位置データを合成することで信頼性を高めています」

なるほど。手作業か。

旧式の魔法情報端末だけあって、情報量が微妙なものも納得がいく。

「……冒険者ギルド？」

初めて聞く名前だ。

冒険者……冒険をする人のことだろうか。

「冒険者ギルドは、冒険者と呼ばれる人々に仕事を斡旋^{あつせん}する場所です。魔物や盗賊などの討伐^{うちばつ}を冒険者に依頼することで、治安の維持という役目も担っています」

「その冒険者つてのには、どうやってなればいいんだ？」

「ギルドで登録をすルことで冒険者になれます。登録費用は1万ジークです。1万ジークは、大人が1日働いて稼げる程度の金額です」

なるほど。金を払うだけで登録できるという訳か。

1日働いて1万つてことは、前世で使われていた『円』と同じくらいだな。

1円イコール1ジーク。分かりやすい。

「……要は、仕事をくれる場所つてことか？」

「そうです。手に職を持たない者は、冒険者になるのが基本です。魔物との戦闘を行う危険な仕事ですが、誰^{だれ}でもなることができます」

なるほど。

魔物……確か魔力災害によって発生した、危険な生物のことだな。

普通の動物に比べて力が強く、体が大きく、そして凶暴な傾向にある。

前世の世界では、人工魔法知能が暴走した時に大量発生して、大きな被害を出したはずだ。暴走事故の死者200万人のうち、100万人近くが魔物の影響だという話もある。

だが俺の生きていた時代には、魔物など存在しなかった。

魔力災害につながるような大規模で危険な魔法装置は、ほとんど使われていなかったからな。

そのため俺は、魔物との戦い方など全く知らない。

「魔物と戦うって、俺にもできるのか？」

「この世界の戦闘用魔法を使えば、可能です。魔法を表示しますか？」

「頼んだ」

俺がそう答えると、端末の画面が切り替わり——いくつかの魔法陣が表示された。いずれも初めて見る魔法陣だが、魔法式の読み方自体は義務教育で習った。書いてある魔法陣はかなり単純なので、俺でも問題なく構築できそうだ。

「これ、どんな魔法なんだ？」

「一番上から順に、敵に電気の槍ヲツ……」

そこまで言ったところで、魔法情報端末はピーピーという音を立て始め、それから静かになつた。

どうやら、フリーズしたようだ。

叩いたり魔力を流したりしようとしても、端末はウンともスンとも言わない。

「……壊れたか」

随分古かったようだし、壊れるのも無理はないか。

とりあえず、この世界が異世界だと教えてくれただけでもよしとしよう。

そう考えつつ俺は、画面を見る。

画面には、魔法情報端末がフリーズした時の画面——つまり、攻撃魔法の魔法陣が書かれていた。

「試してみるか」

俺がいた世界はとても平和だったので、戦闘用の魔法など使うのは初めてだ。

攻撃魔法の魔法陣などは、危険な情報ということで一般人には触れられないようになっていたし。

そんなことを考えつつ、俺は一番上に書いてあった魔法陣を組んでみる。

だが……何も起きない。

……攻撃魔法だから、対象の設定が必要なのか。

そう考えて俺は、近くにあった木の幹を目標に設定してみた。

すると——魔法陣から青い雷が出て、狙ったとおりの場所へと当たる。

そして、青い雷が当たった場所が燃え上がった。

「おっと」

このままでは山火事になってしまう。

俺は慌てて水魔法を構築して木についた炎を消した。

……立っている木は大量の水分を含んでいる……というか半分以上は水でできているため、とても燃えにくい。

ガスバーナーで多少炙ったくらいでは、表面を漕がすのが精一杯だろう。

それを一撃で燃え上がらせるとは……どうやらさつききの雷魔法は、かなり威力が高いようだ。

そんなことを考えていると——遠くから悲鳴が聞こえた。

「誰か！ 助けてくれ！」

どうやら何かトラブルでも起きたようだが——今の俺にとって、そんなことはどうでもよかった。

悲鳴が聞こえたということは、そこには人がいるということだ。

地図の入った情報端末が動かない今、この森を抜け出すには人から聞き出すのが一番だ。トラブルのある場所に自分から行くのは気が引けるが……行ってみるか。

そう考えて俺は、悲鳴が聞こえた方へと向かう。

すると……一台の馬車が、猛スピードで走っているのが見えた。

その後ろを、大型で目の赤い猪いのししが追いかけている。

——魔物だ。

「やってみるか」

俺はさっき、攻撃魔法を覚えたばかりだ。

いきなり実戦で使うのは少し危険な気もするが……やってみるか。

そう考えて俺は、さっきと同じ魔法陣を構築し、猪へと狙いを定める。

すると……バシツという音とともに雷の槍が猪へと命中した。

雷の槍を受けた猪が、転倒する。

そして猪は、数回痙攣し……動かなくなった。

「え、今ので倒せたのか……?」

猪は、人間よりさらに大きかった。

何度か魔法を使わなければ倒せないと思っていたのだが……一撃で倒せてしまったようだ。

攻撃魔法ってすごいんだな……。



そんなことを考えていると、馬車が止まった。

どうやら、猪がもう追いかけてこないことに気付いたようだ。

「た、助かった！ もう終わりかと思ったぜ！ ……俺は、商人のジートリだ。御礼をした
い！」

そう言って馬車に乗っていた男が、こちらへ駆け寄ってくる。

どうやら助けた男は、ジートリという商人だったようだ。

「俺はミナトだ。こっちこそ助かったよ」

俺は、ジートリにそう答えた。

ジートリの服装は、随分と昔風だ。

なんというか……前の世界で、中世と呼ばれていた時代の服装に近いような気がする。

「助かった？ どう見ても助けられたのは俺の方だよな？」

俺の言葉を聞いて、馬車に乗っていたジートリが怪訝な顔で俺に聞いた。

「……まあ、まさか異世界から転生してきた挙句、魔法情報端末が壊れて道に迷ったなんて思
うわけがないよな……。」

だが、もしジートリの悲鳴がなければ、俺は今もまだ森の中をさまよっていたことだろう。

そんなことを考えながら俺は、商人のジートリに魔法情報端末を見せて言う。

「実は魔法情報端末が壊れてしまって、町の場所が分からず困ってたんだ」

「……変な箱だな。それに地図が入ってるのか？」

「ああ。……それで、町に行くためにはこの道を真っ直ぐ行けばいいのか？ 水も食料も持っ
ていないから、できれば近いと嬉しいんだが」

そう言っただけで、馬車が向かおうとしていた方角を指す。

道が続いているからには、恐らくどこかには町があるのだろうとは思うが……町まで徒歩3

日とか言われたら、俺は道中で干からびて死ぬことになってしまう。

しかし魔法情報端末を知らないなんて、こいつは商人として大丈夫なのだろうか。

「この道をまっすぐ行った先にも、もちろん町はある。でも、どの町に行きたいんだ？」

「どの町でもいい。……町の名前なんて知らないからな」

なにしろ俺は、この世界の町の名前など一つも知らない。

中途半端ちゆうはんぱんに分かったふりをするより、何も知らないことを伝えて色々教えてもらった方がいいだろう。

「どこでもいいって……。俺は今からマイニアに行くところだが、それでいいなら案内するぜ」

「助かる」

もう一度道に迷って森をさまようとかは、できれば遠慮したいからな。

案内してもらえらるなら、それはありがたい。

「……そんな強いのに、町の名前を知らないとはな……。もしかして、山奥で修行でもしていたのか？」

山奥で修行。

いい言い訳だな。これから使わせてもらおう。

「実はそうなんだ。そのせいで、かなり世間知らずだな。……まあ、攻撃魔法を使った経験はほとんどないから、今のはぶっつけ本番って感じなんだが」

「初めてでバースト・ボアが倒せるわけないだろう。……俺は魔法のことはよく知らんが、バースト・ボアは魔法攻撃が効きにくい魔物だと聞く」

「そうなのか？」

「ああ。魔法使いメインのパーティーだと、苦戦するらしいぜ」

そう話すジートリに俺がついていこうとすると、ジートリがふいに立ち止まった。
どうやら、何かあったようだ。

「どうした？」

「あのバースト・ボア、置いていくつもりか？」

そう言ってジートリは、倒した魔物の死体を指す。

……どうすればいいか分からないので放っておくつもりだったが、さすが流石に放置は駄目か。

「倒した魔物って、どうすればいいんだ？」

「どうするもこうするも……持っていけば、いい値段で売れると思うぞ。バースト・ボアの毛皮はただでさえ高いんだが……驚いたことにこいつは、体の表面に大した傷がない。質のいい

革が取れそうだ」

そう言つてジートリが、魔物の体を眺める。

どうやら、この魔物の素材にはそれなりの価値があるらしい。

まあ、売れるなら持つて帰つておこう。

なにしろ、今の俺は一文無しなのだから。

そう考えて俺は、汎用収納魔法に魔物の死体を放り込んだ。

「……収納魔法か？」

俺が魔物を収納したのを見て、ジートリがそう聞いた。

「ああ。収納魔法なんて、別に珍しくもないだろう？」

「収納魔法自体は別に珍しくないが……バースト・ポアつて、重さ何百キロもあるよな？ そ

んな重いものを入れられる収納魔法は初めて見た」

「普通は、どのくらい入るんだ？」

「せいぜい30キロだな。俺達商人は荷馬車を使うが、冒険者なんかだと収納魔法の容量を基準にして装備を決めるらしいぜ」

なるほど。

どうやらこの世界の住民は、収納魔法の容量が少ないようだ。

前世の世界でも収納魔法の容量には個人差があったが、大体誰でも5トンくらいは入れることができた。

そのため魔導輸送車が量産されて安くなるまでは、適当な人間の収納魔法に荷物を入れて、人間ごと輸送するなんてやり方も取られていたくらいだ。

だが、この世界では収納魔法に頼った輸送はできないようだな。

……そう考えながら俺は、大量の荷物が積まれたジートリの馬車を見る。

「よし、とりあえず出発しようぜ。ほやほやしていると日が暮れて魔物が増える」

「まだ魔力には余裕があるから、同じ魔物なら何とかなるけどな。道案内の間は、倒せる魔物くらいは倒すよ」

「……それはありがたい。お礼は弾むよ」

道案内してくれたうえ、報酬までもらえるのか。

ラッキーだ。

報酬と言えば……。

「ギルドの登録には、登録料がかかるんだよな？ さっきの魔物を売れば、登録料を稼げるか？ 実は無一文でな」

「あー。ギルドに登録した後じゃないと、魔物は売れないんだよ。……まあ、これで登録すればいい。さっき助けてくれた分と、残りの道中の護衛報酬だ。マイニーアは新人冒険者の多い

町だから、登録した後にできる依頼も多いだろう」

そう言ってジートリが、俺に小さな袋を渡した。

開いてみると、中には金貨が20枚入っていた。

「200万ジークある」

……200万ジーク？

確かこの世界での1ジークの価値は、1円と同じくらいだったはず。

ちよつと高すぎないだろうか。

「護衛代としては高すぎないか？」

「いや、あのまま行けば俺は十中八九死んだからな。受け取っておいてくれ」

……そう言ってくれるなら、ありがたく受け取っておくか。

無一文の俺にとっては、とても助かる。

「……ありがとう」

「礼を言うのはこっちだ」

そんな会話を経つつも、俺達はマイニアへと進んで行く。

マイニアまでの道は意外と複雑だった。

とどこどころ分かれ道があるのだが、それを間違った方向に行くと狩り場——要は魔物がいるだけの森へと出てしまうらしい。

ジートリの案内のおかげで迷わずに済んだが……一人だったら、辿りつける自信がなかったな。

第一章

それから半日ほど後。

「見えてきたぞ」

遠くの方で、マイニニアの町が見えてきた。

町並みも、なんだか古い。

ジートリの服と同じく、中世風って感じだ。

高層ビルなどの高い建物はなく、大きい建物でもせいぜい4階建てのようだな。

「町って、どこもあんな感じなのか？」

「あんな感じって？」



「建物の造り方とかだ。あんまり高い建物はないみたいだが……」

「ああ、そのことか。王都とかに行けば、4階建てとかのデカイ建物がいっぱいある。マイニアは田舎いなかでも都会でもないから、こんなもんだな」

なるほど、4階建てで一番高いくらいなのか。

……文明レベルの低い世界なのかもしれない。

その割には、魔法情報端末が落ちていたのが不思議だが。

「でも、森の中に比べれば建物が多いだろ？」

「そうだな……」

前世の世界だと、都会には鉄筋と魔法反重力装置を使った高さ数百メートルにも及ぶ建物が立ち並んでいた。

随分な落差だ。

そんなことを話しつつ歩いているうちに、俺達はマイニアーへと辿り着いた。

「色々世話になったな。ありがとう」

「いや、こっちこそ命を助けられたよ。……もしかあったら、いつでもジートリ商会に来てくれ」

そんな言葉を交わして、俺はジートリと別れた。

ちなみに、もらった金は収納魔法の中に入れてある。

収納魔法の中身は盗まれないので、貴重品は収納魔法に入れるのが基本だ。

「さて……ギルドはっと」

街の中には、あちこちにギルドの場所を書いた看板があった。

どうやらギルドは、街の中では重要施設として扱われているらしい。

看板に従って歩いていると、立派な建物が見えた。

入り口には、冒険者ギルドと書かれている。

「ここか」

俺はギルドに入り、辺りを見渡す。

ギルドの中は、とても活気があった。

『素材買取窓口』『依頼窓口』などといった感じで、沢山たくさんの窓口が並んでいて、窓口では受付嬢と冒険者が話していた。

そんな中に、『新規登録窓口』と書いた窓口があった。

専用の窓口が用意されているとは。ジートルリが言っていた通り、新規登録者の多い町のようにだ。

考えてみると、このギルドは若い冒険者がとても多いし、全体的に新人向けなのかもしれない。

いな。

そう考えつつ俺は、窓口に行く。

「ギルドに新規登録したいんだが」

「分かりました。それでは、この紙に必要な事項を書いて持ってきてください」

そう言って受付嬢は、慣れた手つきで『冒険者ギルド 登録申請書』と書かれた紙を俺に渡した。

受付嬢の名札には、「シエラ」と描かれている。

「ありがとう」

俺は申請書を受け取りながら、必要事項に目を通す。

申請書に書かれている必要事項は、驚くほど少なかった。



必要項目は名前、使用武器、戦闘スタイル。

この3つだけだ。

「名前はミナトつと。戦闘スタイルは……」

戦闘スタイルは選択式なので、分かりやすかった。

剣士、槍^{やり}使い、盾^{たて}使い、弓使い——

この辺の職業は俺には選べない。

なにしろ俺は、武器に触ったことすらないのだから。

そんな俺が剣やら弓やら持ったところで、何もできないだろう。

そう考えつつ俺は、どんどん選択肢を消していく。

そうして、消去法で残ったのは一つだった。

「魔法使いだな」

魔法使い。これしかない。

戦闘魔法を扱ったのは今日が初めてだが、魔法陣を構築して魔法を発動させるという意味では変わらない。

別に戦闘用の魔法だからといって特殊な魔法構成が使われていたわけではないし、まあ剣や弓やらを持つのに比べれば使えるだろう。

「……武器？」

名前を書いたはいいが、武器が問題だ。

今まで一度もまともな実戦経験がないのに、使用武器を決めろと言われても困る。

「まあ、なしでいいか」

魔法を使うのに、武器など必要ない。

もしかしたらこの世界の魔法使いは武器を使うのかもしれないが、まあさつきは武器なしでも魔物を倒せたし、必要になった時に買えばいいだろう。

そんなことを考えながら申請書を書いている途中——ふと気付いた。

この申請書、俺が知らない言語で書かれている。

そして俺が今この申請書に書き込んだのも、知らない言語だ。

知らない文字なのに、なぜか読めるし、書ける。

これは転生の影響だろうか。

まあ、字が読めないよりは読める方がずっといいので、とりあえず喜んでおこう。

「書けたぞ」

「はい！ ……あれ？」

受付嬢が俺の書いた申請書を見て、怪訝けげんな顔で申請書の一部を指した。

武器の欄だ。

「『なし』と書いてありますが……魔法使いなのに、杖つえを使わないんですか？」

「杖って何だ？」

魔法を使うのに、道具など必要ない。

杖など持って、一体どうするのだろう。

「杖は魔法の発動を補助する道具で、持っている魔法の安定性が増すんです。杖を使わなくても魔法を発動できる人はいますけど、戦闘中に魔法の発動に失敗したらすごく危ないので、使っておいたほうがいいですよ」

そう言って受付嬢が、杖とやらを見せてくれた。

……見た目は、ただの綺麗きれに削られた木の棒ぼうだな。

こんなものを持っただけで、魔法の安定性が増すのだろうか。

「……持ってみてもいいか？」

「はい。それを持って、魔法を使ってみてください」

そう言われて俺は、簡単な光魔法を使ってみた。
すると……違いが分かった。

なんとというか、魔力が凄まじく重い。

魔法陣の構成スピードが、極端に遅くなっている。
この杖が、俺の魔力の通り道をふさいでいるのだ。

確かに魔力の通り道をふさげば、魔法陣をゆっくり構築することができるので、魔法構成には失敗しにくくなる。

前世の世界でも、工業用などに特注の複雑な魔法陣を組む仕事の人が、こういった道具を使っていたことがあった。

だが……普通の魔法を使うなら、こんな道具は不要だ。
自分で構築した方が、よほど早い。

先ほど使った雷魔法の魔法陣などは、小学校卒業レベルの魔力コントロールがあれば十分に可能だ。

前世の小学校では、3年生あたりまで基本の魔力コントロールをみっちりやらされるので、みんなそれなりの魔力コントロール力がつくのだ。

……まあ、この世界で戦闘用に使われている魔法陣を見て、必要になったら杖を買えばいいか。

ジートリが資金をくれたおかげで、多分安いやつなら買えるし。

そんなことを考えていると……受付嬢が俺に言った。

「あ、光魔法が使えるんですね。ダンジョンとかに向いているかもしれません」

「……そうなのか？」

「ダンジョンの中は暗いので、光魔法が重宝するんです」

今俺が使った光魔法は、数ある魔法の中でも最も基本的なものだ。

小学生が魔力操作を覚えた後に、真っ先に習うくらいだからな。

夜トイレに行く時などに、よく使ったものだ。

この魔法を使えない者など、魔法使いにはいなかった。

それでダンジョン向きと言われるとは……この受付嬢は、新人冒険者を褒めて自信をつけさせることが仕事内容なのだろうか。

そんなことを考えつつ、俺は受付嬢に杖を返した。

「ああ。じゃあダンジョンを考えてみよう」

「そうするといいと思います。2つの属性に適性を持っている冒険者さんとかだと、他にも色々できますが……とりあえず、調べてみましょう」

そう言っつて受付嬢が、水晶玉のようなものを6個取り出した。

「それは？」

「属性の水晶です。この水晶には属性があつて、その属性に適性を持った人が触ると光ります。触ってみてください」

「なるほど」

俺が話を聞きながら白っぽい水晶に触ると、光った。

「光属性は適性がありますね」

「まあ、さつき使ったからな」

というか、属性に適性なんてあるのだろうか。

そんなことを考えながら俺は、隣にあった黒っぽい魔石に触る。

すると……光った。

「闇属性も適性があるみたいです。光と闇が両方扱えるのは、珍しいですね」

「……そうか？」

そう言いながら俺は、次々と魔石に触っていく。

魔石は、触る端から光った。

まあ、当然と言えば当然だ。

魔法に適性があつて、それ以外の属性だと使えない、などという話は聞いたこともない。そう思っていたのだが……。

「全属性……まさか、賢者!？」

受付嬢の反応が、あまりにも大きすぎる。

新人冒険者を褒めて自信をつけさせるための演技としてはあり得ないレベルだ。

「……は？ 賢者？ 新規登録の新人が？」

「いや、剣士の聞き間違いだろ」

ギルドの中にいた他の冒険者も、こそこそとこつちを見ている。
どうやら全属性が使えるのは、特別なことのようにだ。

「なあ。賢者って、珍しいのか？」

「それはもう、すごく珍しいです！ 5年前までは、王国の魔法師団長が唯一の賢者でしたが……5年前に亡くなってしまったから、この国に賢者は一人もいません」

魔法師団長……なんだかすごそうだ。

賢者認定されてしまうと、不自由になりそうだな……。

「今の測定結果、多分間違いだぞ。さつき光魔法を使ったのが、残ってたんだ」

「残ってた？ そんなことありますか……？」

「ああ。もう一度やってみよう」

「そうやって俺は、風の魔石に手を伸ばす。

置かれていた魔石の属性は、風、土、火、水、光、闇の6種類だ。

この中で一番使い道が少ないのは……風属性か。

風属性の魔法は目に見えないものが多いから、こっそり使ってもバレなさそうだし。

手を近付けると光るということは、恐らく魔力に反応しているはず。

手からできるだけ魔力を放出しないように制御して、水晶玉に手を近付ければ――。

「よし！」

光らない魔石を見て、俺は歓声を上げる。

偽装成功である。

「……なんで、賢者じゃないって分かって喜んでるんですか？」

「賢者とか、面倒臭くさそうだからな！」

そう言いながら俺は、残り5つの魔石にも触り、もう一度光らせた。

賢者にはなりたくないが、使う魔法に縛りがかかるのもそれはそれで面倒だ。

だから、5つだけ光らせておく。

「そ、それでも5属性……！ 残念ながら賢者ではなかったみたいですけど、すごいですよ！」

「そうなのか？」

「5属性は賢者と違って、全国に情報が広まるようなことはありませんが……それでもすごく珍しいです。魔法使いは属性が多いほど強いといわれているので、きっとミナトさんはすごく強い冒険者になります！」

受付嬢は力強く、そう宣言した。

するとギルドにいた冒険者達が、またざわつき始めた。

「流石に賢者ではなかったか……」

「でも賢者じゃないってことは、国に召し抱えられることもないってことだよな？ スカウトのチャンスじゃないか？」

そんな会話が、後ろから聞こえてくる。

5属性でも目立つのか……。

だが全力を出しても、戦場で生き残れるとは限らない。

そんな戦場で使える魔法を使わずに戦うなど、自殺行為だ。

だから多少目立っても、使える選択肢は多い方がいい。

風属性の魔法だって、必要となれば躊躇ちゅうちゅうせずせうに使うつもりだ。

「では、風を除く5属性の魔法使いで、登録しておきました。詳しいことはこれを読んでください」

そう言って受付嬢は、俺にギルドカードと『新人冒険者の手引き』と書かれた冊子を渡した。ギルドカードには、Fランクと書かれている。

しかし、新人冒険者の手引きなんてものまで用意されているのか。

「新人冒険者さん向けに、ギルド主催での初心者冒険者講習も行われています。無料で受けられますから、一度は受けておくのをおすすめしています」

そう言って受付嬢は、『新人冒険者の手引き』の裏面に書き込まれている初心者冒険者講習の日程を指した。

万全のサポート態勢だ。

「随分手厚いんだな」

「新人冒険者の多い町ですから。新人さんはここで経験を積んで、他の町で活躍するんです」
なるほど。

マイニールはギルドの新人育成所という訳か。

そんなことを考えながら俺は、初心者冒険者講習のスケジュールを確認する。

……ちょうどいい時間に、初心者冒険者講習があるようだ。

「冒険講習の一番近い回って、今から30分後か？」

「30分後ですね。確か空きがあったはずなので、予約を入れておきますね」

そう言って受付嬢が、初心者冒険者講習の予約を入れてくれた。

「では、30分後にギルドの訓練所に来てください。初心者冒険者講習は意外とハードなので、食べ過ぎたりしないようにしてくださいね。動けないと大変です」

「ありがとう」

そう言つて俺は、ギルドを後にした。

◇

それから30分後。

俺が訓練所に来ると、訓練所の真ん中で剣を振っていた男が声を張り上げた。

どうやら、あの男が教官のようだ。

「よし、冒険者講習やるぞ！ 集まれ！」

その言葉と共に、俺を含めて3人の男が集まって来た。

どうやら受講者は、3人のようだ。

「全員！ 武器は持ってきてるな！」

俺達が集まったのを見て、教官がそう声を張り上げる。

そんな中、受講者の一人が聞いた。

「講習に武器を使うんですか？」

「当然！ 座学ならギルドで本でも借りて読め！ 俺は本なんぞ読んだことはないがな！ ガ
ハハ！」

そう言って教官が、大声で笑い……次に、質問をした受講者に言った。

「冒険者なら、敬語を使うのはやめておけ。ナメられちまう」

「分かった」

聞いた冒険者は、武器を持っているようだが……。

俺は当然、杖など持ってきていない。

そのことに、教官も気付いたようだ。

「おい、そこのお前。噂の5属性魔法使いか。杖はどうした？」

「杖は使わないつもりだ」

俺の言葉を聞いて、教官が怪訝な顔をする。

「……お前まさか、杖なしで魔法が組めるのか？」

「単純な魔法ならだけどな。攻撃魔法は1種類しか知らない」

「1種類か。まあ、初心者魔法使いはそんなもんだ。……それでも杖なしで組めるなら、大したもんだな」

そう言いながら、教官が俺達から距離を取る。

刃の潰れた剣（おそらく、訓練専用）を構えて言った。

「よし、剣士ども！ 一人ずつかかってこい！」

俺以外の新人冒険者は、2人とも剣士のようだ。

教官の言葉を聞いて、一人の新人冒険者が前へと出て、剣を構える。

「いくぜ！」

かけ声とともに、新人冒険者が試験官の方へと踏み込み、大上段に構えて剣を振った。だが、剣を振るタイミングが早すぎて、これでは剣が届く前に振り切ってしまうようだ。そんなことを考えてみると——教官は微動だにせず、その様子を見守っていた。

案の定、新人冒険者の剣は空振りする。

「距離を取りすぎだ！ もっと踏み込め！ ビビっても逆に危険なだけだぞ！」

「お、おう！」

そう言って新人冒険者が、教官に攻撃を仕掛けていく。

教官はその攻撃を一通り剣で捌いた後——新人冒険者の隙を突いて、足をひっかけて転ばせた。

「うわっ！」

息一つ切らさずに新人冒険者を倒した教官は、新人に向かって言う。

「そこそこ戦えるじゃねえか。剣筋はマシな方だ。……マイニア・ブルくらいは相手にもいいぞ。……だが、その距離を取り過ぎる癖は直しておけ」

今の新人冒険者は一方的にやられたように見えたが、どうやらいい線をいっていたようだ。

そんなことを考えながら様子を見てみると、もう一人の冒険者が教官へ向かっていく。

「いくぜ！」

「来い！」

新人冒険者が、教官に向かって剣を振る。

だが——なんだか、前の冒険者に比べて剣の振り方が頼りない感じがする。

剣の速度は前の冒険者と変わらないのだが、剣がフラフラとしている感じがするのだ。

教官はその剣を受け止め——一撃で弾き飛ばした。

そして、首に剣を突きつけて言う。

「……話にならないな。戦闘依頼はまだ早い。素振りからやり直してこい」

「マイニーア・ラビットくらいなら戦ってもいいか？」

「死んでも知らんぞ。魔物をなめるな」

なるほど。

冒険者講習の実態が、理解できてきた。

これは講習という名の、腕試しだ。

まだ自分や魔物の実力をよく分かっていない冒険者に実力を理解させ、適正な依頼を教える。これが恐らく、この講習の目的だな。

新人冒険者にとっては、確かにありがたい。

俺もどんな依頼を受けていいのか、全く分からないからな。

そんなことを考えながら立っていると、教官がこっちを向いた。

「よし、終わった奴やつは帰っていいぞ。……あとはお前だな」

「……俺も戦うのか？ 武器を持ってないんだが」

「魔法使いは実戦なしだ。こいつに向かって魔法を撃て」

そう言って教官が、試験場の隅に置かれた的のようなものを指す。

木で作られた、随分と貧弱そうなのだが……使い捨ての的だろうか。的は全部で5つある。

「的が5つあるみたいだが、順番に撃てばいいのか？」

「そうだ。連射速度も大事だからな」

なるほど。

とりあえず、左端から撃ってみるか。

「いくぞ」

そう言って俺は、バースト・ボアを倒すのに使った魔法陣を組み始めた。

連射速度が重視されそうだが、初心者なのだから速さを求めず、慎重に発動するのを心がけよう。

そんなことを考えつつ、俺は連続で魔法を発動させた。

慎重に組むと、1回で2秒くらいかかる。

急いでやればこの倍くらいは速度が出せそうだが、一撃で木を燃やせる威力の魔法を適当に使う気にはなれない。

実際、俺の雷魔法が命中した的は片っ端から炎上しているようだし。

「よし、これで終わりだ」

5個目の的に魔法を命中させて、俺はそう呟いた。

随分と時間をかけてしまったが……呆れられていないだろうか。

そう考えながら後ろを振り向くと——教官は、口をあんぐりと開けていた。

「……は？」

呆れられてしまっただろうか。

「もうちょっと急いだ方がいいか？ 暴発するといけないから、慎重に魔法を使ったんだが……」

「……ここで待っていてくれ」

そう言って教官が、ギルドの中へと戻っていった。

しばらくして戻ってきた教官は、一人の男を連れていた。

……連れてこられた男は、冒険者にしては体格が細い。

「未知の魔法を使った5属性持ちというのは、こいつか？」

「ああ。初めて見る魔法だったぜ」

そんなことを話しながらやってきた男が、俺の前まで来て言った。

「俺はこのマイニールアで魔法教官を務める、マギクスだ。……君が未知の魔法を使ったと聞いたが、それは本当か？」

「……未知かどうかは知らないが、雷魔法を使った」

「ちょっと見せてく——」

そう言ってマギクスは的を見て……黙り込んだ
いや、正確には的「だったもの」を見て黙り込んだ。

的はすでに、燃えて炭と化していたからだ。

まあ、使い捨ての的では炭になってしまうのも仕方がないが。

「あれをやったのはお前か？」

「ああ。……この的を使うのは初めてだったんだが、もしかして使った後は消火すべきだったか？」

ただの木とはいっても、資源は有限だ。

たとえ使い捨ての的であっても、使える部分は残すとかした方がよかったのかもしれない。そう考えて、俺はマギクスの言葉を待つ。

だが……マギクスの言葉は、予想とはだいぶ違った。

「あの的、なんで燃えたんだ？」

「そりゃあ、雷魔法が当たったからだが——」

「魔法で燃やした!? あれをか!？」

「ああ。……もしかして、高価なものだったのか？」

ただの木の的を燃やしたくらいで、ここまでの騒ぎになってしまふとは……。
弁償をすべきだろうか。

そんなことを考えていると、マジクスが言った。

「いや、安くはないが……問題はそこじゃない。何であれを燃やせたんだ？」

そう言つてマジクスが、黒焦げくろこになつた的を指す。

燃えた理由など、さつきから何度も言っているのだが。

「普通に雷魔法で燃やしたんだ」

「普通の雷魔法で、あの的は燃えない！ ……あれはただの木に見えるかもしれないが、幾重にも強化魔法や耐火魔法が施された強化木材製だ！ 簡単に燃えてたまるか！」

……そうだったのか。

魔法が付与された木なら、近くで見れば分かるのだが……俺は的に近付かずに魔法を使った

ため、気付かなかったようだ。

「……その雷魔法、使ってみてくれ」

「的はもうないが、何に撃てばいい？」

「これでいい。……強化木材ではないがな」

そう言ってマジクスが、地面に角材を置いた。

強化魔法がかかっている様子もないし、乾いていて燃えやすそうだ。そんなことを考えつつ俺は、魔法陣を組み、角材に雷魔法を撃った。

すると、バコン！ という音と共に、角材が吹き飛んだ。

……乾いた木に雷魔法を撃つと、こんな感じになるのか……。

「いや、おかしいだろ」



俺の魔法を見て、マギクスがそう言った。

「何がおかしいんだ？」

「魔法の威力だ。……普通の初心者冒険者の攻撃魔法って、このくらいの威力だからな？」

そう言ってマギクスが、角材をもう一本地面へと投げ——炎魔法を放った。

なんとというか……炎が弱々しい。

放たれた炎魔法は頼りなく揺れ、今にも消えそうだ。

その外見を裏切らず、炎魔法は角材にぶつかると、表面をわずかに焦^こがして消えてしまった。

「……これじゃ、戦闘には使えなかないか？」

「その通りだ。普通の魔法使いは、攻撃を剣士や弓使いに任せてサポートに徹する。属性が多いほどいいと言われるのは、属性が多いと使える補助魔法が多いからだ」

なるほど……。

ギルドの受付嬢が俺の光魔法を見て「ダンジョンに向いているかも」などと言った理由がよ
うやく分かった。

「じゃあ、攻撃魔法は使わないのか？」

「剣士が攻撃する隙を作るために、目を狙って魔法を使ったりする場合が多いな。だから攻撃
魔法は、威力より弾速や命中精度が求められる。……圧倒的な威力を出せる奴だと、話が別だ
けどな」

そう言ってマギクスが、壊れた的を見る。

……冒険者社会での魔法使いの立場は、何となく分かった。

だが……魔法がこれほどまでに弱い理由は、まだ理解できていない。

「普通の魔法使いの攻撃魔法って、なんでそんなに弱いんだ？」

「弱いんじゃないかって、これが普通だ。……魔法使い系でも上位の冒険者はさっきの雷くらいの

魔法を使えたりするが、あくまで非常用だな。魔力消費が多すぎて、3発も撃てばそれで魔力切れだ」

……マジかよ。

今の魔法の魔力消費なら、俺は500発くらい撃てる気がするんだが。

そんなことを考えつつ俺は、マジクスに聞いた。

「でも、俺は攻撃魔法が使えるみたいだが……どうしたらいいんだ？」

俺は初心者冒険者講習を受けに来たのだ。

初心者冒険者として、これからどうしたらいいかを教えてもらわなくては、講習に来た意味がない。

「そうだな……冒険者をやりたいなら、冒険者をやるといい。お前ほど才能のある人間なんて他にいないだろう。……もし国への仕官を望むなら、俺が推薦状を書く」

「国がどうかは面倒臭そうだから、冒険者だな。もう登録も済ませたし」

こんなよく分からない世界で国に仕えるとか、自殺行為もいいところだろう。なにしろ俺は、町の名前すら知らないような常識知らずのよそ者なのだ。

こんな俺ができる仕事など、冒険者くらいのもんだろう。

「分かった。それならランクアップの推薦状を書きたいところだが……今までに依頼をこなしたことはあるか？」

「一度もないな。ついさつき登録したばかりだし」

「……それだと推薦状でのランクアップはよくないか……。冒険者としての経験がないままランクが上がっても、ろくなことがない」

なるほど。

そこまで考えて、ランクアップの推薦とかをしてくれるんだな。

「じゃあ、自力でランクを上げることにするよ。……とりあえずあの魔法があれば、魔物と戦えるんだよね？」

「戦えるどころか、もっとランクの高いパーティーでも主力になれる」

……あの壊れた魔法情報端末が教えてくれた攻撃魔法、便利なんだな。

魔法情報端末に、感謝しなくては。

「分かった。ありがとう」

そう言って俺は訓練所を離れようとしたが……一つ聞き忘れていたことがあったのを思い出して、立ち止まった。

それから、マギクスに聞く。

「攻撃魔法の勉強をしたいんだが、おすすめの本はあるか？」

「魔法の勉強……？ あれほどの魔法が使えるんだから、本を読む必要なんてないんじゃないか？」

「……実は俺が使ええる攻撃魔法は、あの雷魔法だけなんだ。他にも攻撃魔法があるなら、習得しておきたくてな」

それを聞いて、マギクスは呆れたような顔をした。

「あの雷魔法しか使えないってことは……初めて習得したのが、あの魔法だったことか？」

「そうなるな」

「ことごとく規格外だな……。まあいい。魔法の勉強がしたいなら『攻撃魔法便覧』を読むといい。ギルドで貸し出しているからな」

そう言ってマギクスが、訓練所を去っていった。

……とりあえず例の雷魔法が優秀だということは分かったが、できれば他にも攻撃魔法を確保しておきたいところだ。

今のままだと、電気が効かない魔物が出てきたら一発でアウトだし。

そんなことを考えながら俺は、ギルドの窓口へと向かった。